

[学会]

第708回 千葉医学会例会

神経内科例会

日時 昭和59年10月20日

場所 千葉大学医学部附属病院

1. 水中毒の1例

高橋伸佳・福武敏夫

(千葉県救急医療センター)

症例：41歳女性。以前より多飲傾向にあったが、昭和59年6月下旬より頭痛、倦怠感出現、26日になり突然、痙攣・意識障害をきたした。血清電解質の低値、特にNaの低値(119mEq/l)と、CTでの脳腫張を認めたが、他の検査所見は正常であった。昭和56年より神経衰弱状態にあり、強迫的飲水による水中毒と考え、Na補給、水分制限を行ない治癒した。水中毒・SIADHと、精神疾患との関連における視床下部の役割が、今後更に問題となると思われる。

2. 甲状腺機能低下症に伴った小脳失調症の1例

檜山幸孝、寺沢捷年

(富山医科薬科大・和漢診療部)

慢性甲状腺炎に伴った小脳性運動失調症例につき治療による改善経過を重心動揺計・電気眼振計を用いて観察した。T₃・T₄の正常化後まずOKNの解発が改善され、重心動揺計では開眼時の改善が早くみられ、閉眼時の改善は半年後にみられた。TRHの急性負荷試験では静注後3分で約50%の重心動揺面積の減少を示し、この効果は約70分持続した。原発性甲状腺機能低下症に伴う小脳性運動失調症の改善にTRHが有効である事を示した。

3. 壊疽性病変を伴った糖尿病症例における中枢性・末梢性神経障害の神経生理学的検討

栃木捷一郎(都立豊島・内科)

インシュリン治療中の糖尿病13例、神経学的に異常を示さない非糖尿病対照9例について末梢神経伝導速度、ならびに聴覚性脳幹誘発電位の検討を行った。前者では危険率0.1%以下、後者ではV波、I—III、I—V波間でそれぞれ1%、5%、1%以下で有意差を示した。(Student-t検定)

以上から脳幹、中脳にかけての中枢性のニューロパチーが推定され、De Jongらの病理学的知見と一致すると考えられた。

4. 救急患者として入院した頭蓋内感染症例の検討

福武敏夫・高橋伸佳

(千葉県救急医療センター)

センター開設以来4年間に救急入院した頭蓋内感染症例45例を検討した。①化膿性髄膜炎は12例で50歳前後の男性に多く、全例基礎疾患を有し、死亡5と予後不良であった。死亡例の来院時体温は38.4°C以上と高かった。②単純ヘルペス脳炎は確診例のみで7例、死亡1だが後遺症は多かった。眼振様眼球運動、無呼吸が注目された。③無菌性髄膜炎/脳炎群は22例。死亡2例では髄液細胞数正常、蛋白高値であった。項部硬直(+)は1/3と低かった。

5. 急性意識障害・外眼筋麻痺・痙攣対麻痺・運動失調・聴覚失認のみられた慢性プロバリン中毒の1例

新井 洋・岩淵 定(鹿島労災)

永井 将道(銚子市立・精神科)

慢性プロバリン中毒の症状は、意識障害・瞳孔異常・複視・眼振・構音障害・失調性歩行・腱反射亢進・難聴・視神経炎等の特徴とするが、聴覚失認を含む大脳高次機能障害に関する記載は見当たらない。今回我々は、5年にわたるプロバリン大量摂取後、上記症状に加え、聴覚失認を呈した30歳男性例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

6. 垂直性眼球運動障害

——殊に選択的下方視障害について——

北野邦孝、栗原和男、今井尚志、

鈴木丈司(松戸市立)

水平性眼球運動の機構については今日までにほぼ解明されて来ているが、垂直性、殊に選択的に下方視障害を